

イヤホーン

文・高安義郎
絵・芝 章一

共に還暦を過ぎた光男と良美夫婦には何の心配事もなかった。一人息子も独立し他県で暮らしている。

「波風の少ない、平凡な夫婦ですね」

良美が言った。

「そうだな、平凡が一番さ」

光男もかねがねそう思っていた。良美は庭いじりが趣味で、光男は近くの沼や川で釣りをするのが趣味だった。

「お父さん、今年はテッセンが見事に咲いたわよ」

「そうか、玄関に飾るといいな。ところで今日俺はヘラブナ五匹とコイも釣つたぞ」

夕餉の折はいつも互いの趣味の報告をし合うのだった。

ある時、元同僚に誘われ、光男は近くの工場にパートで働くことになった。良美も公園や施設の庭を手入れするボランティアに誘われ、仲間入りすることになった。

「四丁目の公園の薔薇、すてきよ」そう

言いながらスマホで撮った花壇の風景を見せながら、

「私が剪定してたらね、班長さんに自分

の代わりに班長にならないかって言われちゃったの」

「実は俺も社員になつて、工員の教育係を頼みたってさ」

夕餉のひとときの会話は相変わらず楽しく続いた。思えばこの夫婦は喧嘩らしい喧嘩をしたことがなかった。毎日のように日々の出来事を話す習慣が、穏やかな二人にしていたのかも知れない。

そんなある日、ボランティア仲間に教えられ、良美はラジオを聞きながら作業をする事を覚えた。小さなラジオをポケットに入れイヤホーンを耳にすると、道路を行き交う車の音も気にならなくなつた。良美の影響で光男もラジオを購入し聞き始めた。すると二人の話題はラジオで聞いた情報交換へと変わつて行つた。

「今朝聞いた、あのコメンティイターの意見、どう思う?」

「どうして返事しないんだ」

光男は更に声高に言つた。同時に、

「何が気に入らなくて返事しないの」

良美もついつい言い方をした。

声をかけても、返事がないことに腹をたてるのもつまらないからと、二人は互いに呼びかける回数を減らしていった。

やがて二人の会話は少しづつ遠のき始めた。ノウゼンカズラが咲いたと

か、枝切りを手伝えとかといったかけ合いのような声がめつきり少なくなつていつたのだ。

「おい母さん、もう十二時を過ぎたが昼飯はどうする」と、声をかけた。だが返事はない。丁度その頃良美も、

「お父さん、そうめんを茹でたいからお鍋に水を入れて火にかけておいて」と、声高に言つた。だが光男の返事はない。三十分ほどして良美が庭から上がりつてきた。

「あら、お鍋かけておいてくれなかつたの」

良美は半ば腹立たしげに「言うが光男は返事をしない。

「飯はどうするつてさつきから言つてるだろ」

光男が声高に言つた。だが良美の返事はない。

「どうして返事しないんだ」

光男は更に声高に言つた。同時に、

「何が気に入らなくて返事しないの」

良美もついつい言い方をした。

声をかけても、返事がないことに腹をたてるのもつまらないからと、二人は互いに呼びかける回数を減らしていった。

光男は仕事先の仲間と居酒屋に行くようになり、良美は良美で帰宅の遅

くなつた光男を待つのが馬鹿馬鹿しくなつて、ボランティア仲間と出歩くことが多くなつた。

気がつくと夫婦の会話はなくなつていたのだった。どうしても伝えなければならぬことがあると、大声で怒鳴るようになつた。普段の声ではイヤホーンを耳にしている二人には聞こえないのだ。かつては『シャクヤクが咲いたから庭に下りてこい』と誘つたり、『ウグイスが鳴いてるよ』と言つては二人で耳を澄まし合つたものだが、次第に声をかけることさえ億劫になり、夕食も別々に取ることが多くなつた。

寂しい夫婦になつた原因に気付くのに二年の歳月が必要だった。良美が誤つてラジオを水溜まりに落とし、使えなくなつたのがきっかけだった。

「前にも言つたが、ラジオは家の中ではやめにしないか」

光男が言つた。この提案は実は三度目なのだが、良美は初めて聞いた話だから考えておく、と言いながら、新しいラジオを買いに出かけたのだった。

ラジオが二人の会話に割り込んでいたことに良美はまだ気付いてはいない様子だった。

